

特別支援教育実践マニュアル

保育園・幼稚園・小学校・中学校版

< 5 >

～ ことばの発達 サポート特集号 ～

特別支援教育実践マニュアル No.5 をお届けします。

ことばは、コミュニケーションや学習などを積み重ねていくための基礎となります。子どもは、園や学校、あるいは家庭の様々な場面で、ことばを学んでいきます。

今回は“ことばの発達”につまずきのある子へのサポートの一例を紹介します。

特別支援教育は、個々の子どもの実態に即して教育目標を立て、それを達成するための具体的な手立てを考案し、実践していくものです。

本マニュアルがことばの発達支援の一助となれば幸いです。

“ことばが気になる子”いませんか？

事例 11（発音）

赤ちゃんことばが抜けない。正しく発音できない音がある。
（例）さかな しゃかな、たかな、かかな

事例 12（吃音）

話すときに、つかえたり繰り返したりする。

事例 13（聞こえ）

後方からの呼びかけに気がつかない。行動が遅れがち。

事例 14（読み書き）

文字がなかなか覚えられない。大きさや形が整わない。

浦安市教育委員会
教育研究センター

「はい！」たったひとことを言うために・・・

ことばは、いろいろな力や条件が組み合わさって働いた結果、生み出されます。どの部分が未熟なのか、苦手なのかを把握した上で、子どもにかかわることが大切です。



事例 11（発音） 赤ちゃんことばが抜けない。正しく発音できない音がある。

小学 1 年生の L さんは、学習や友だち関係では心配ないのですが、発音が気になります。例えば、先生を「てんてい」、学校を「だっとう」と言います。友だちに聞き返されたり、「何を言ってるのかわかんない」と言われるようになりました。そう言われると、L さんは悲しそうな表情で黙ってうつむいてしまいます。

* 発音の問題には 器質性（口蓋裂など） 運動障害性（麻痺など） 機能的な原因（舌の動かし方の未熟性など）があります。L さんの場合は と考えられます。

L さんへのサポート例

ミニ知識：個人差はありますが、おおむね 5～6 歳くらいまでには大人と同じように発音できるようになります。

さりげない通訳 せっかく発言したのに、周りの子が L さんの言っていることがわからなかったときは「そうだね。さかなだよね」とさりげなく通訳をしてください。

文字 発音にひっばられて文字表記も同様に間違えている場合があります。正しい発音ができなくても、文字表記は修正してください。

家庭への アドバイス

どうすれば「せんせい」「がっこう」と正しく言えるのか、L さんにはわからないのです。直したいと思ってもできないのに、言い直しをさせられたり、「わからない」と言われると L さんは話をすることに自信をなくしてしまいます。「　だね」と相槌を打ちながら、正しい発音を聞かせましょう。誤った発音との違いを聞き分ける力を育てることが大切です。

事例 1 2 (吃音) 話すときに、つかえたり繰り返したりする。

小学2年生のMさんは明るくてしっかり者。ハキハキとおしゃべりしますが、3歳頃から時々「あ、あ、あ、あのね」と繰り返したり、力をこめてしぼり出すように話し始めたりしています。最近、ことばが出にくいときに瞬きが多くなりました。

* 音や語の繰り返し、話し始めの力み、瞬き(随伴症状)は、いずれも吃症状のひとつと考えられます。

Mさんへのサポート例

ミニ知識：吃音は発話リズム(流暢性)の障がい。必ずしも、心理的な原因があるとは限りません。

音読の工夫 一緒に読む子(人)がいると、吃症状が軽くなります。クラス全員、列ごとなどの複数で読む体験を重ねることで、スムーズな発話運動が定着していきます。

内容重視 流暢に話すことは難しくても、内容やその子らしさが伝わることを大切にしていくと、周囲も本人も会話に満足感を得られるでしょう。

家庭へのアドバイス “舌をこのタイミングで動かそう”という脳からの指令や、実際の喉や舌の動きに余裕をもてるよう、ゆったりした雰囲気をつくって会話することが大切です。1日5分でも、“のんびりしたあいづち”を意識しましょう。

事例 1 3 (聞こえ) 後方からの呼びかけに気がつかない。行動が遅れがち。

年長組のNちゃんは、年齢相応の遊びやおしゃべりもしていますが、友だちが「Nちゃん」と後ろから呼んでも気がつきません。先生がお帰りの会で話し始めると、きょろきょろと落ち着きがなくなります。また、言葉だけで指示すると、自信がなさそうに周りを見ながらワンテンポ遅れて行動します。

* Nちゃんのように会話ができる子や、落ち着きがなくなる子の場合、聞こえについては見逃さされがちですが、軽度の難聴(中耳炎の進行など)であることが考えられます。

Nちゃんへのサポート例

ミニ知識：聞こえにくい状態では、誰もが当たり前前に知っていることばや表現が、意外と身につかないままであることがあります。

肩をたたいて Nちゃんは聞こえにくいために、視野に入らないところから声をかけられても気づきません。Nちゃんの肩を軽くたたき、前に回るなどして、Nちゃんと目が合ってから話しましょう。

文字や絵 Nちゃんは、ことばが音としては聞こえていても、そのことばをはっきりと聞き取れないことがあります。文字や絵などの視覚的な手段を使って、情報を補いましょう。そうすることで、落ち着いて話を聞き、自信を持って行動できるようになります。

座席 Nちゃんは耳からの情報が入りにくい分、クラスの友だちの様子、先生の口元や表情などを見て情報を補っています。窓際の前から2列目あたりだと、逆光にならずに先生の顔が良く見えます。2列目なら前の席の友だちを見ながら行動、作業をすることもできます。

家庭へのアドバイス 静かな場所で、内緒話ができるでしょうか?もしも聞こえていないようならば医療機関で聞こえの検査をしてもらいましょう。

*すでに補聴器を装着している子どもの場合、補聴器の扱い方や管理の仕方について保護者から情報を得ておくとうれいでしょう。

事例 14 (読み書き) 文字がなかなか覚えられない。大きさや形が整わない。

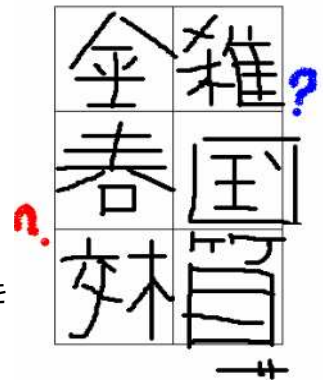
中学1年生のPさんは、授業を聞いて理解しているようですが、ノートをとるのに苦戦しています。小学校低学年で習った漢字を思い出すのにも、時間がかかります。何度練習しても、1画多すぎたり、形がまとまらずにマス目からはみ出したりします。また、アルファベットのb、dをいつも読み間違えてしまいます。最近、遅刻が目立つようになりました。

*LD(学習障害)には様々なタイプがあります。Pさんの場合は「読み書きの力だけが著しく弱いタイプ」だと考えられます。

Pさんへのサポート例

ミニ知識：読み書きの困難さによる学習遅進がベースとなり、生徒指導上の問題に及んでいる事例は少なくありません。

読み方の工夫 Pさんは“書く”以前に、“読む”ことが苦手かもしれません。目の動かし方が未熟なために、教科書の行や文字を飛ばして読んでしまう子もいます。子どもの様子をみて、文節ごとに線で区切ったり、行ごとに厚紙や定規(カバー)をずらしたりして読む方法なども試してみましよう。



書き方の工夫 Pさんは、文字の形を正確にとらえていないかもしれません。そのような場合「見本を拡大する」「板書の内容を手元におく」だけでも効果的な場合があります。

また、文字を書く際には「罫線を太いものにする」「語呂合わせなどのヒントを思い出しながら書く(例：dは左足、bは右足)」などと工夫した事例があります。

課題の調節 本人・保護者と話し合い、学習意欲や達成感を失わないよう課題の量や形式を決めるとよいでしょう。授業や家庭学習で、パソコン、電子辞書、計算機などを利用した例もあります。

家庭へのアドバイス 文字以外の手段を活かして、知識を蓄えていくことも必要です。テレビやパソコンによる情報も、学習やコミュニケーションを円滑にする道具となります。

「見守っていていいの？」
「ことばの専門機関を紹介しようかな？」と思ったら・・・

まず、まなびサポートにご一報下さい。子どもの状態によっては、専門的な練習が望ましい場合があります。担任が気づいた(気になった)時点でも保護者や子ども自身から相談を受けた時点でも結構です。

まなびサポート事業

教育研究センター 美浜北小学校内 381-7960-7961

まなびサポート相談室 見明川中学校内 390-5204